

・ 書評

WWF 黒書—世界自然保護基金の知られざる闇—

ヴィルフリート・ヒュースマン著 鶴田由紀訳 緑風出版、2015

253 頁、2,600 円+税

ISBN 978-4-8461-1516-6



WWF (World Wide Fund for Nature) と聞いて、自然愛好家の中では世界自然保護基金だということを知っている人は、大勢おられると思います。正確な名称は知らなくても、世界的な自然保護団体であることはご存知だと思います。きちんと自然を保護して、世界中の豊かな自然を守っていることは疑いようもないことであると、多くの人々に思われているのではないのでしょうか。事実、WWF は世界 90 か国に 500 万人以上の会員を擁しています。

この著書はもともとドイツ語で書かれたもので、それを英訳したものを、『ストップ風力発電』（アットワークス、2009）の著者で、北海道自然保護協会でも講演していただいたこともあるフリージャーナリスト鶴田由紀さんが翻訳したものです。

現在 WWF 日本 のホームページでは、大型のネコ科の動物の保護をうたっています。世界中でトラなどの大型ネコ科動物は生息数が極端に減っていて、その生存が危惧されています。そんな状況を回避するため WWF は職員を派遣し、現地で保護に努めています。しかし、そのやり方は、先住民が動物たちと共存して生きてきたことを無視し、先住民を追い出し、強制的に移住させて保護区を設定し、結果的に動物も先住民も窮地に陥れているというのが現実のようです。現地の人々と共に暮らすことによって、動物たちは密猟者から守られ、人々も豊かな森の中で昔ながらの静かな暮らしを続けることができた、のにです。

WWF は特にアフリカや東南アジア、南アメリカなどの資金力のない国々の豊かな自然の保護活動に援助をしていることになっています。ところが、自然を守るということを隠れ蓑に、協賛企業からスポンサーとして多額の寄付金を集め、ある意味では、自然保護をしているというお墨付きを与え、協賛企業をやりたい放題にさせているということ、この本は暴いています。

モンサントはベトナム戦争の枯れ葉剤や遺伝子組み換え作物で有名なバイオ化学メーカーですが、同社のラウンドアップという有名な除草剤はインドネシアやマレーシアのパームヤシ（アブラヤシ）農園で使われています。オランダと英国に本拠をおく食品・家庭用品のグローバル企業であるユニリーバはインドネシアで自然の森林を皆伐し、パームヤシを植え、パームオイルを生産しています。両社ほか多くのグローバル企業がスポンサーとなっている WWF は、パームオイルは持続可能なエネルギーだとか、多くの食品や洗剤の原料として安全なものであるとして生産を支持しています。WWF は、生物多様性を破壊するパームヤシの単一農園を広大な地域で作ることを許し、オランウータンの住める森をほんのわずかな国立公園にしか残さないようなことを黙認しています。さらに農園の工場は廃液を垂れ流し、現地の水源を汚染しています。WWF は、パームヤシ農園は緑の森として二酸化炭素の吸収を促進して温暖化防止に貢献し、現地の人々にも安定した収入をもたらしているとしています。現実にはグローバル企業のなすがままを許し、企業が現地の人々から土地を買い取り、買占めることを容認し、結果的に何の不安もなく暮らしていた人々を貧困に陥れています。同様なことがブラジルでもバイオ燃料用大豆の生産に対しても行われており、現地の農民たちがまともに生活できないようにしています。

はたしてこれが世界自然保護基金という名を名ののにふさわしいかどうか。多くの皆さんに「WWF 黒書」をお読みいただき、その実態を知っていただきたいと思います。

なお、本書のドイツ語版は WWF により発売差し止め訴訟があり、本書英語版は WWF の主張を入れて一部修正したものであること。

(種田昭夫)